

忙 申 閑

2月、息子が医師国家試験を受験した。受験前後の様子を聞きながら、自分の頃と比較した。2日間の試験が終了し、ドキドキしながら自己採点を行うが、当時は持ち帰った問題用紙に記載した解答を模範解答と照合し合計点を出したのが、現在は自身の解答を入力するだけですぐに正答率が出るそうだ。採点結果を誰に伝えたかと言えば、あの頃は家族や親しい友人に伝える程度だったと思う。ところが現在は採点結果をSNSで公開する受験生が少なからずいるそうだ。試しにSNSを見ると、高得点の採点結果が写真付きで投稿され、「医師免許取れそうです」「私の勝ち」といったコメントが添えられていた。努力の成果を喜

び、共有することは素晴らしい。しかし、これを目にする人々、特に合格ラインに満たなかった受験生やその家族の気持ちを考えると、複雑な心境になった。

SNSの発展により、コミュニケーションの形は大きく変わった。特に若者にとってSNSは主要なコミュニケーション手段となり、リアルで話すことが苦手な人も増えたように感じる。リアルの会話とSNSを比べると、前者では話す相手が目の前におり、反応がすぐ返ってくるため、会話を楽しもうとすれば相手が興味を持ちそうな話題を自然に選択し、相手が好まない話題は避ける。一方後者では相手（自分のフォロワー）が多数いてその反応も様々であるた

SNSにおける一私見

広報委員 久徳 美樹

め、相手の好む話題より自分が発信したい話題を投稿する。捉え方は多種多様であり、肯定も否定もすべて目に入る。文字に残る分、特に批判的なコメントの場合は投稿者のストレスになることがある。自分などはそのストレスを避けてSNSへの投稿はあまりしなくなった方だが、批判的なコメントを気にしなければ、言いたいことをいつでも吐き出せるSNSは快適であろう。

ところがリアルの人間関係、特に医師と患者の関係においては相手の話を聞くことから診療が始まる。患者のタイプも様々で、中には苦手なタイプもいて、非難を頂戴することもある。その時思い出すが「苦手と思う患者こそ話しに行け」とい

う、先輩医師からの言葉である。批判を受けた相手と話すことは気後れするが、何度も会話を重ねるうちに相手の心情が理解でき、会話も円滑になってゆく。気付けば相手を苦手だと思っていたことを忘れていることもある。

SNSは便利なツールであり今後も発達するであろう。しかしリアルな対話からしか得られないものは確かに存在し、それは人を成長させてくれる。「私の勝ち」と投稿していた研修医達にも、リアルの人間関係の中で学び、成長する機会を多く持ってほしいと願っている。